

方向

第一五五号 一九九三年四月三〇日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

花の時

1993 03 24 原 田 慶

今日

白もくれんが咲いて雨が降っている

長い沈黙の後に

音もたてずに開く球形

花卉をつたい

雨のしずくが光って落ちる

明るさのにじむ春の空に

ひかりをかかけ物語るように

真白に咲くその花の位置の確かさ

数日の後

突然に花をおわる

落

花

わたしたちに見えるのはそれだけだけれど
木はまちがいなく高くなり太り
枝を張り大きくなってゆく
木が初めて老いるのはどういふ時なのだろうか

1993 03 27

若草に

ひとつひとつ落ちる赤い椿

しおれてゆく花の静けさ

胸にふかふかと沈めた

しべの束も枯れ

みずからを抱きしめて閉じる花びら

土に帰るものはすべて土の色をしている

レンギョウは黄色い花籠を編みはじめ

春

嵐

青紫のスマレは小波のようにそよぐ

空のかなたを指すクルミの若枝

季節は入れかわろうとして

こんなにも明るい

そしてああ真実あなたは

赤い椿であった

ビワの若芽が

白い矢羽根のように

空に向かってつがえられた

黄色く疲れた古葉は

いちまいたちまたいと枝を離れる

春の嵐は幾度やってきて

1993 04 09

原

田

慶

去りゆくものを

追いたてただろうか

雲が光りながら通り過ぎ

にわかにか空がくらくになると

小粒の雨が屋根を鳴らし

風が窓をゆする

ふたたび陽気な太陽が顔を出せば

小鳥はさえずり

カラスが鳴きかわしながら

高く飛んでゆく

巣からころげ落ちた鳩の卵は破れ

おどろいて飛び去る親鳥

ビワの実が枯れた花の中から

小さな頭を出し

古葉はかすかな音をたてて落ちつつける

顔熱感君酒
 含曾^ナ唐^ナ中^ナ聲^ナ
 花娘^ナ簪^ナ綵^ナ容^ナ屏^ナ
 休睡笑芙蓉屏
 誰截太平管
 列點排空星
 直骨開花風
 天上驅雲行

山本のぶを刻（一九九〇・一）

李賀 申胡子感角栗栗歌 ヒチリキの歌

この歌には長い序文がついている。それによると、北の国境勤務の李なる人がたまたま長安の下宿の向かいに泊り合わせ、李賀を宴会に招いた。その従者の申胡子（しんこし）がヒチリキの名手で、寵妓の花娘（かじょう）は歌がうまい。そこで李賀がこの歌をつくり、さっそく作曲して、みなで合唱して楽しんだ、というのである。上のはその半分。後半は次回。これも一部を改訳した、あまり変わり映えはせぬが。

君が酒に 面ほてれば／鳴りいでし ヒチリキの音や／蓮の
 屏風の かげに眠らで／かんざしゆらら 花娘舞ふかな／こ
 れやこの 太平の笛／きら星と 穴を刻みて／吹く声は 花
 咲かず風／天上に 雲を走らす／…

（1993 04 15 原田憲雄）

06-08. その仏国土は宝生という名で、そのカルパは有宝という名であろう。その仏国土は平らで、魅力的で、玻璃で作られ、宝樹で飾られ、割れ目も穴も除かれ、尿や糞の溜まりも除かれ、ここちよく、花が覆っているだろう。またそこでは、樓閣の楽しみのうちで、生活することになるだろう。この仏には無量の声聞たちがいて、数えようとしても数えきれないだろう。またそこには幾千万億という多数の菩薩たちがいるだろう。その世尊の寿命は十二中劫、正法は二十中劫、像法もまた二十中劫のあいだ続くだろう。その世尊は虚空の中におられて、つねに法を説き、幾百千もの多数の菩薩、幾百千もの多数の声聞たちを教化されるだろう。

ratnasambhavam ca nāmāsyā tad-buddha-kṣetram bhaviṣyati / ratnāvabhāśā ca nāma sa kalpo bhaviṣyati / samam ca tad-buddha-kṣetram bhaviṣyati ramaṇīyam sphatikā-mayam ratna-vṛkṣa-vicitritam apagata-śvabīra-prapātam apagata-gūthodigallam manojñam puṣpābhikīrṇam / kūṭaśāra-paribhog-egū cātra puruṣi vāsam kalpayiṣyanti / bahavaś cāsyā śrāvakā bhaviṣyanti aparimānā yeṣāṃ na śakyam Gaṇanayā paryanto 'dhi Gaṇam / bahūni cātra bodhisattva-koṭi-nayuta-śata-sahasrāṇi bhaviṣyanti / tasya ca dhagavato dvādaśāntara-kalpān āyuṣ-pramaṇam bhaviṣyati / vimśatim cāntara-kalpān saddharmāḥ sthāsyati / vimśatim evāntara kalpān saddharma-pratirūpakāḥ sthāsyati / sa

ca dhagavān vaihāyasam antarīkṣe sthitvā tīkṣṇam (W: dhīkṣṇam) dharmam deśayisyati bahūni ca bo-
dhisattva-gāta-sahasrāṇi bahūni ca śrāvaka-gāta-sahasrāṇi vinegyati ||

06-09 さて、世尊は、そのとき、つぎの偈を説かれた。

atha khalu dhagavāms tasyām velāyām imā gāthā abhāsata ||

06-10. いま、わたしは告げよう、比丘たちよ、いまこそ、わたしの教えを聞くがよい。

スプーティ大徳、このわたしの声聞は、仏となるだろう、来世において。(一七)

三千万億にも満ちる、威力ある、仏たちに出会って、

ふさわしい修行をおこなうだろう、さとり智慧を得るために。(一八)

最後の化身において勇者は、三十二の相貌をそなえ、

黄金のユーパのような偉大な聖仙となるだろう、世間に同情するために。(一九)

そのよき国土はすばらしく、多くの人にとって、望ましく、魅力的で、

世間にとって親しい仏は、そこに住むだろう、幾千万億の衆生を保護して。(二〇)

そこには多くの大神力の菩薩たちがいて、不退転の法輪を転じ、

機根鋭く、ツナの教誡により、この仏国土を輝かすであろう。(二一)

多くの声聞たちもまた、そこには無数にいて、数えることなどけっしてできず、

六神通と三明をそなえた神力者であり、八解脱に通達している。(二二)

この無上道を説き明かすときの、仏の神通力は、思慮のおよばぬものがあり、ガンガー河の砂の数ほど多い天や人たちが、つねにそのひとに合掌するだろう。(二三) そのひとは、十二中劫のあいだとどまって、正法は二十中劫つゞき、

像法もまた二十中劫のあいだ続くだろう、両足ある者の最高の人の。(二四)

ārocayāmi (W:ārocayāmi) aham adya bhikṣavaḥ prativēdayāmy adya mama (W:mama) śrīnōtha /
sthaviraḥ subhūtir mama śrāvako 'yaṃ bhaviṣyate buddha anāgate dhvani ||17||
buddhāṃś ca peśyitva mahā 'nubhāvān triṃśac ca pūrṇā nayutāna koṭīḥ /
carisyate carya tad-ānulomikīm imasya jñānasya kṛtena caisām (W:caisāḥ) ||18||
sa paścime vīra samucchrayasmin dvātrimśatī-lakṣaṇa-rūpa-dhārī /
suvārṇa-yūpa-pratīmo mahā-rṣir bhaviṣyate loka-hitānukampī ||19||
sudarśanīyaṃ ca suksētra bheṣyati iṣṭaṃ manojñāṃ ca mahā-janasya /
vihariṣyate yitra sa loka-bandhus tāritva prāṇī-nayutāna koṭīḥ ||20||
bahu-bodhisattivā 'tra mahā 'nubhāvā avivartya cakrasya pravartitārāḥ /
līkṣendriyās tasya jñānasya śāsane ya (W:ye) śobhayisyanti ta-buddha-kṣetram ||21||
bahu-śrāvakās tasya na samkhyā teṣāṃ pramāṇu naivāsti kadā-ci teṣāṃ /
śaḍ-abhijñā-taividya-mahā-rddhikāś ca aṣṭā-vimokṣeṣu pratīṣṭhitāś ca ||22||

acintiyam rddhi-balam ca bhesyati prakāśayantay īmam agra-bodhim /
devā manusyā yatha gaṅgā-vālikā bhesyanti lasyo satatam kṛtāñjali ॥23॥
so dvādaśo antara-kalpa sthāsyaṭi saddharmu vimśāntara-kalpa sthāsyaṭi /
pralirūpako vimśātim eva sthāsyaṭi kalpāntarāṇi dvi-padoṭtanasya ॥24॥

人身供養について

1993 04 19

「法華經巡礼 一五」で「序品第一」の偈に関し、「布施のなかに、奴婢、妻子、などの人身が含まれるのは、昔のことであっても厭わしいが、習慣としてあったのだろうか」と記した。この人身供養のことは、その後も心にひっかかっていたが、あるときふと、つぎのようなことを感得した。文字通りの「感得」で、そのことをまだ經典の記述や、歴史の記録に、確かめているわけではないが、さきの疑問が、經典に対する誤解を招く結果となっているかもしれないので、とりあえず書きとめておく。読者諸賢の教示を得たい。

仏は、無所有が本質だから、布施を受けても、それを所有しない。布施せられたものは、仏の生命を維持する最小限のもの以外は捨てられる。捨てられたものは、そのものの自由・自然に任せられる。

釈尊の時代のインドの社会では、妻子すら「所有物」であつたらしい。だから人身の布施が成立したのである。布施された人身は、仏によって捨てられる。すなわち、特定の人物の「所有」から解放されて、まったく自由な人となり、自然の物となる。これが、仏教における人身供養の本義ではなからうか。

花の季節

1993 04 20

原 田 慶

京都では三月二十八日に桜が咲きはじめたが、四月になって寒い日が続き、満開のまま二週間ほど花の時が止まってしまった。花冷えどころか寒の戻りでお花見の気分にはならなかったが、出かけたついでにあちこちでたくさんの花を見た。近くの立本寺の桜は花の雲のようで、春休みの子ども達が下を走りまわり、教科書どおりの風景である。この境内の桜はほとんどがソメイヨシノで何本か紅しだれがまじっている。数えたことはないけれどみんなで二十本くらいあるのではないだろうか。子どもを連れただけのお母さんが、花の下でお弁当を食べさせたりしていて、お花見の客が集まってくるようなところではないが、のどかな町の憩いの場になっている。

十一日には、友達と三人で二条城へお花見に出かけた。この日も、時おり小雨のぱらつくような天気だったが、一重、八重、いろいろな桜が咲いていた。しだれ桜などまだ咲いていない木も多く、昨年にくらべると寂しかったが、桜の前で何枚も写真を撮った。桜は、遠くから全体を撮ると花の雲のようではっきりしないし、花を数個だけ写すと色もほのかなだけに、もの足りない感じがする。花と人いっしょに写すのが似あう花のようである。二条城は、いつの季節も観光客の絶えないところだけれど、やはり花と紅葉の季節は特に多いようである。広い庭園だから、木も思いきり高く大きく枝を張り、吹きあげるように咲く花はどれもみごとというほかはない。青く澄んだ空に薄いピンクの花のわっと咲く美しさは、その雰囲気が人を酔わせる。西行の、

ねがはくは花のしたにて春死なんそのきさらぎのもちづきのことろ

という歌の下の句がうまく出てこず、三人であれこれ言いながら歩いたが、花の下にはいって人は、生き返って出てくるのだとも聞いたことがある。

翌一日おいて十三日に、北白川へ出かけることがあり、用事をすませてから白川沿いに銀閣寺へ歩いた。途中、白川天神というスクナヒコナノミコトを祀った神社があり、白川にかかる石橋のたもとに枝垂れ桜が二本咲いていた。見る人もなく静かな陽のあたる場所に咲く花は、わたしにとって一期一会だろうけれど、ずいぶんのどかな感じがした。

銀閣寺道へ出ると突然に人の波である。哲学の道のほうへは人が列をつくって歩いて行く。銀閣寺へはいる人のほうが少ない。花見の人と観光の人とは違うのである。わたしは人の波を避けて銀閣寺へ入り、そこからすぐ前の山の下の方の狭い道を歩いて法然院へ行った。山手のほうにある家の庭に、紅しだれがみごとに咲いている。花見のコースに外れて山の中腹にひとり咲く花は何を思っているのだろうか。立ち止まってしばらく眺めていたが、ただうららかな春の景色であった。

法然院は山の冷気が沁みとおるような静かな寺で、本堂の仏像がすぐ近くの山に向いて座しておられるのが印象に残る。寺では誰かの葬儀の準備がされていた。ここには、谷崎潤一郎、堂本印象、内藤湖南、九鬼周造など、よく知られた人たちの墓もある。

道を少しずつ下って哲学の道と交差するところへ出た。満開の花が時々、風にひらひらと舞っている。人々はほんとうに嬉しそうに話したり笑ったりしながらいっばいになって歩いている。ここは若い人もいる花見の場所

である。学生などのお花見というのはあまりないものであるが、哲学の道というのは若い人に似あっている。川を渡るようにそこを横切ると、ずっと人影がない。すぐ近くの地つづきに居ながら別の世界である。虫でも鳥でも生きものが群れをなして集まると異様な感じがするが、人の集まるのも変わらないのではないだろうか。

桜花いまだ盛りと人はいへどわれはさぶしも君としあらねば

大伴宿祢池主が大伴家持の下に仕えていて転任になり、その旅の途中で別れを惜しんで家持に送った歌だという。人々が仲よく群れ集う花の季節だから、別れた人や亡き人をいっそう悲しく思い出すのである。

十四日には気温が十八度までであり、十五日には二十度、ようやく春らしい気候になった。立本寺の桜は花吹雪になって散り敷いた。十八日の日曜日には最後の花見が楽しめるだろうということだったが、北野まで行ったついでに、紙屋川をへだててすぐ西の平野神社へまわってみると、さすがにソメイヨシノはほとんど散っていて、名残りの花を染しむ町内会のお花見らしい人々の声がしていた。社殿のまわりには、遅咲きの桜が咲いて、木の傍に三脚を据えて写真を撮ろうとする人が何人も、シャッターチャンスを待って立ちつくしている。

平野神社には、昔は百種類もの桜があったが、今では四十種類くらいになっているという。御衣黄というのはめずらしい緑色の花である。三センチほどの八重で、花がめだたないから見る人が少ないが、花びらは透きとおるように美しい。どうしてギョイコウというのか神社の人にたずねてみたら、昔の神官の狩衣の色だからという。寝覚桜というのがあり、何かいわれがあるのかと思つたが、鮮やかな緑の葉とともに白の一重の花の咲くのがすがしく、春の眠気を覚ましてくれるからだろうということ、ちょっと期待外れだった。他に、

魁、普賢象、突羽根、平野妹背、衣笠、大内山、虎尾、手弱女、有明、楊貴妃、嵐山、松月、胡蝶、御車返などというのがあり、御車返はあっさりした白の一重で、後水尾天皇が、あまりにうつくしいので御車を返して御覧になったのでそう呼ばれるが、古名は桐ヶ谷といい、鎌倉のその名の谷に由来するのだそうである。桜の名前は、発見された土地や、交配の品種によるもの、花の色や姿、エピソードによるものなどさまざまであるらしい。おけさ桜は三十年ほど前に、民謡の佐渡おけさをうたう村田権三という人が、自分の交配した五十センチほどの桜苗を献上したものだそうで、今ではかなりの大きさになって、たくさんの花をつけている。

これは本で読んだことであるが、全国どこにも多い染井吉野は、吉野山の桜とは関係なく、江戸の染井村の植木屋によって吉野桜として売りひろめられたもので、オオシマザクラとエドヒガンの雑種だろうとされている。吉野山のヤマシロザクラと混同されることを防ぐために、明治の頃にソメイヨシノと名づけられたというのが、もっとも確からしいと書かれている。花の雲に酔っているのがお花見というものだろうが、花盛りの過ぎた後、遅れて咲いてくる色々の種類には、花に趣のあるものが多いようである。

二十日には気温が二十五度にもなり、わが家のサトザクラが咲きだしたと思ったら、みるみる満開になった。何という名前かわからないが、十なん年前に、かたちが悪くてさまにもならないと植木屋の隅に立て捨てられていた二メートル余りの木を、こんなものどうするのかと笑われながら買ってきて、主人が工夫して育てた桜である。見たことはないけれどヤマザクラの一種だという樺桜は源氏物語の紫の上にたとえられる。わが家の桜は若々しく少女のようにひかえめで、しかも気品があって賢こそうにみえる。この花を紫の上といったら褒めすぎ

で、桜が恐縮するかもしれないが、それほど美しいとわたしは思っている。

来年にでも薄墨桜を見に行こうと友達と話しあった。何百年という老樹の根に、若木の根を継いで生き返えらせたという桜である。サトザクラ系やソメイヨシノは六十年が平均寿命だそうだが、ヒガンザクラ系は四百年から五百年、ヤマザクラ系も三百年から四百年生きるそうである。有名なあの薄墨桜はヒガンザクラ系なのだろう。是非とも見たいものである。

近所の人が門前に立ち止まって、

「ええなあ奥さんとは、いろいろな花がっぎつぎ咲いて」と言う。

「あの黄色い花はなんていうの」

「レンギョウ」

「レンギョウか、ほなああの紫の花は」

「あれはハナズオウ」

「ハナズオウか、ふうん、聞いたかてじき忘れるんやわ」

忘れることならわたしも人には負けないが、あの人は今までそんなことを言わなかった。近所の奥さん達もみんな年をとってゆく。人も花も老いてゆくものなのだ、当然のことを今年に初めてのようにしみじみと感じている。

中国の詩には、さまざまな形式のものがあります。五言絶句、七言絶句、五言律詩、七言律詩、古詩などは有名で、楽府とよばれる文体のあることもかなり知られるようになりました。しかしこれから紹介する「詞」という形式の詩についてはあまり知られていないようです。外国文学の紹介には熱心なわが国のことですから、研究も、翻訳も、いまではかなりの数にのぼっています。しかし、中国文学の研究でもっともおくれている分野のひとつがこの「詞」で、たずさわる人は少なく、「かなりの数」といった紹介も、他の分野にくらべると寥々たるものです。しばらくこれについてお話しようとおもいます。

「詞」の音は「シ」で、詩の音の「し」とまぎらわしく、専門家の間では「詞」のほうを現代の中国音で「ツウ」とよんで、区別しています。ここでもそれに従っておきましょう。「詞」という字は、六朝時代の中頃から音楽の歌詞の意味でつかわれていました。ところが、唐代の中頃からは、花柳界で流行しはじめた音曲の歌詞をもっぱら指すようになったのです。日本のものでいうと、平安末期の今様から徳川の都々逸などに及ぶ俗謡にあたります。「詞」のほかにも「楽府」など、いろいろの別名があります。

楽府 漢代に、民間の歌謡を収集する役所が設けられ、その役所を楽府といい、そこで集めた歌謡を楽府といいました。詞は、その流れをくむもの、という考え方から、詞をも楽府というのです。

新楽府 詞を楽府というのと、もともと楽府であったものごっちゃになりかねません。そこで旧来の楽府と区

別するために、こういうのです。古い楽府は六朝ごろにはすでに音楽から離れ、読む詩のひとつの文体の名になってしまっていました。

近体楽府きんたいがくふ 唐代の中頃に元結という人らがはじめ白居易などによってさかんに作られた楽府体の政治風刺詩を新楽府しんがくふといたので、詞をそれと区別するために、こういうのです。「寓声楽府ぐうせいがくふ」ともいいますが、曲声に寄寓した楽府、音楽にあわせた楽府、というほどの意味です。もともと歌詞であった楽府なのですが、さきに入ったように古い楽府が音楽から離れてしまったので、こういう重複した言い方をしなければならないのです。

填詞てんし 詞は、たいてい曲のほうが先にあって、それに合わせてことばを当てはめた歌詞のことですから、充填てんじした歌詞というわけです。

倚声いせい 声すなわち音楽に、倚よりそうことば、の意。倚声と填詞をあわせて「倚声填詞」ともいいます。

長短句ちやうたかく 詞のおおくが、各句の字数が長短さまざまなので、こういうのです。

楽章がくしやう この言葉は、もとは雅楽の歌辞をさしたのですが、詞にもいうようになりました。

曲子詞きょくし 曲子とは、音曲のことで、「子」は接尾語です。音曲につけたことばだから曲子詞です。「曲子」とも、「曲」とも、「歌曲」ともいいます。

詩餘しよ 詩から派生したものの、詩の末流、というほどの意。

これらの言いかたが詞の集の名としても使われています。ここではなるべく別名は使わず、「詞」とよぶこと

にしましう。

詞は、さきにいったように、曲に合わせて作る歌詞です。もとの曲はおの調子が違い、それぞれに名前がついています。「三字令」「菩薩蠻」「夢江南」などというのがそれで、ちょうど、日本の俗謡に「新内」とか「山中節」「磯節」などがあるようなものです。「三字令」などの調名を「詞牌(しはい)」といいます。詞牌はある調子の名だから、その調子の作品はいくらでも新たに作れるわけで、詞牌はその一首一首の題名ではありません。おのおのの詞牌にも意味はありますが、その意味に関係なく調子だけ合わせた作品が少なくありません。はじめは一首ごとに題をつけることはなかったのですが、のちには題をつけたものも現われます。

詞は、使用する文字の多少によって、「小令」「中調」「長調」などと分けることがあり、他の楽調をひきのばしたり、似せたりといったことで「令」「引」「近」「慢」の四種類に分けることもあります。また一首を分割しないのを「単調」といい、これは短いものにかぎります。長いものは前段と後段に分け「双調」といい、なかには三段、四段に分ける長大なものもあります。

漢詩の絶句や律詩で、韻の踏みかたや、平仄の合わせかたをやかましく言うことは、すでに知られていますが、詞ではこれが詩よりも複雑なので、馴れない人には敬遠されるのです。もっとも、中国語をやらなければ、詩でも詞でも、韻も平仄も実感できず、中国語を学んだひとなら、耳を澄ませば分かることでしょうから、ここではあまり立ち入らず、どうしても必要なことがあれば、そのとき説明することにします。

とにかく実際の作品にはいつてゆきましよう。

ひろ野の林 [唐]李白

菩薩蠻

ひろ野の林ぼうぼうと霧織るよう

さむざむとした山のあたりはかなしい碧

夕暮れの色たかどのに入り

たかどのにいるひとの愁いよ

平林漠漠煙如織。

寒山一帶傷心碧。

暝色入高樓。

有人樓上愁。

人けないきざはしにたたずめば

巢に帰ろうと飛ぶ鳥のはやいこと

「どのあたりまであのかたはお帰りかしら」

おおきな駅ちいさな駅のはるかむこう

玉梯空佇立。

宿鳥歸飛急。

何處是歸程。

長亭連短亭。

「ひろ野の林」は、最初の句からとった訳題です。ここでは、以後も同じような方法で仮に題をつけておきます。これは大詩人として有名な李白（七〇一—七六二）が作ったと伝える菩薩蠻です。おなじく李白の作と伝える憶秦娥とともに「百代詞曲の祖」と讃えられたものです。伝えの真偽については、いまでは疑う説のほうが有力ですが、李白の作でなくても、唐代の詞のなかでもっともすぐれた作の一つであることは疑いありません。

菩薩蠻の起源については、九世紀の中頃、女蛮国が入貢したとき、菩薩の装束をした使者がこの曲を伝えたとか、ビルマの古楽で八世紀の前半、玄宗皇帝の代に中国に入ったとか、いろいろの説がありますが、玄宗と同時の崔令欽が花柳界について記録した『教坊記』にこの曲名が記されているので、そのころ菩薩蠻という音曲が中国でうたわれていたことは間違いない、現存の詞の菩薩蠻がその曲の歌詞と共通のものなら、李白がこの曲を聞いた可能性はあり、聞いて興にのり、曲に合わせて作詞した、ということもありうることです。

菩薩蠻は 双調で四十四字からなり、前後段おのおの四句で、二つの仄字韻と二つの平字韻で構成します。●をつけたのは仄字で韻を踏んだところ、○をつけたのは平字で韻を踏んだところ。すなわち第一句末の織は音が「三」であり、第二句末の碧の音が「三」で、両句は共通する「三」音をもつことばで脚韻を踏んでいるわけです。なお、中国の文字の韻は伝記的に、平、上、去、入の四つに大分類され、平に属するものが平らかな感じであるところから平字といい、これと対し、上、去、入の三つに属するものはかたむいた感じがするので仄字といえます。平字ばかりがつづくの間延びし、仄字ばかりがつづくと同くようなので、平字と仄字の組み合わせかたを考へることによって全体のリズムやメロデーが美しくなるわけです。李白の作の第一句「平林漠漠煙如織」を例にとれば、これは「平平仄仄平平仄」で、かりに平をヒュウ、仄をドンとすれば、「ヒュウ、ヒュウ、ドン、ドン、ヒュウ、ヒュウ、ドン」といった調子になるわけです。

「ひろ野の林」の原文は、後段の「玉梯」を「玉階」、「帰程」を「回程」、「連」を「更」あるいは「接」とする本があります。

前段の「たかどのにいるひと」後段の「きざはしにたたずむ」ひとを、わたしは女性とみて、その女性の恋人あるいは夫が遠く旅に出、久しくなり、予定ではもうとくに帰っておいでのところなのに、いまはいったいどのあたりにいらっしゃるのか、とながめくらししている、ととったのです。当時、国道には五里ごとに駅が設けられ、五里のところの駅舎を短亭、十里のところの駅舎を長亭といったのだそうです。

この「ひと」を女性ではなく、男性の旅人とみる解釈もあり、それなら「どのあたりまであのかたはお帰りかしら」は「どのあたりだろう、おれの帰ってゆくさきは」としなければならぬでしょう。そのほうが伝統的な解釈らしいのですが、作者を男性としその直接的な感想とみるために出てきたもので、作品そのものもつ感情は女性のものではないでしょうか。この詞を英訳した程石泉氏は、わたしと同じように見えています。その後段。

Standing alone on a jade stairway,

She waits in vain

The nesting birds hurry to return.

But where is he and why does he not come home?

Between us there are many stops:

Some are near; some are faraway.

'Chinese Lyrics from The Eighth to The Twelfth Centuries' 1969.

※前号正誤 二四頁 三行 読んくたさる ↓ 読んでくたさる

梁の武帝 (中国の詩人と仏教 三〇)

1993 04 26 原田憲雄

河中之水向東流

黄河の水が 東に流れ

洛陽女兒名莫愁

洛陽のお嬢さん 名は莫愁

莫愁十三能織綺

莫愁十三 はたおり上手

十四采桑南陌頭

十四で桑つむ 南の畑

十五嫁為盧家婦

十五 とついで 盧家の嫁

十六生児字阿侯

十六 やや生み 名はアッコ

盧家蘭室桂為梁

盧家の座敷は 桂が梁で

中有鬱金蘇合香

中は 鬱金や 蘇合のかおり

頭上金釵十二行

髪には 金のかんざし十二

足下米履五文章

足には 五色の絹のくつ

珊瑚掛鏡爛生光

珊瑚の鏡は きらきら光り

平頭奴子提履箱

下男が 靴箱さげて従う

人生富貴何所望

地位も 財産も ほしくもない

恨不早嫁東家王

ワンさんのお嫁になりたかったの

これは「河中之水歌」と題する梁の武帝蕭衍の詩です。皇帝の作品としてはくだけすぎます。そのせいか無名の古人の作とする伝えもあるのです。ところが現存する武帝の詩の半ばはこういう民謡風の詩、すなわち樂府で、さらに港々の遊郭でうたわれた「子夜歌」のたぐいがある半ばを占めることからすれば、「河中之水歌」をかれの作とみていいのではないのでしょうか。樂府は、物語のように虚構を許す形式の詩ですから、普通の詩のように作者の心情あるいは身の上を直接にうたうものではありません。ではあるけれども、これは皇帝になる前の若いころの作品だろうと思われまます。

ところで樂府ではない詩のほうに「会三教」という一首があります。「会」を「述」とする本もあり、三教は儒教・道教・仏教を指しますから、題は「三教に対するわたしの理解」というほどの意味でしょうか。

少時学周孔 少年時代に周公・孔子の道を学び

弱冠窮六經 二十歳で六種の經典を極めた

孝義連方冊 孝・義の論をノートに連ね

仁恕滿丹青 仁・恕の説もあまた著わした

踐言貴去伐 論説の実行には殺伐の根絶が大切で

為善存好生 善事は生命の尊重にこそあろう

中復觀道書 中年にはまた觀察した 道家の書の

有名与無名 「有名」と「無名」に関する説を

妙術鑲金版

微妙の仙術は金版にちりばめられ

真言隠上清

真言には天上世界が秘められている

密行貴陰徳

めだたぬ行為にかくれた徳を積むならば

顯証表長齡

結果は長寿となって明らかにされよう

晩年開釈卷

晩年に釈尊の經典をひらいて読むと

猶日映衆星

太陽が照り輝き衆星は光を失う感じだった

苦集始覚知

苦・集・滅・道の四諦がはじめて覚知され

因果乃方明

因果の理法がやっと明らかになったのだ

示教惟平等

示された教えはまさに「平等」であり

至理帰無生

至極の真理は「無生」に帰着しよう

分別根難一

分別をよびおこす根は一つではなく

執着性易驚

執着する人間の心性が動揺しやすいのだ

窮源無二聖

源を極めれば聖人の道に二つはなく

測善非三英

善を測定するには三教にもかぎるまい

大椿径億尺

大椿という仙樹は直径一億尺だが

小草裁云萌

めばえたばかりのときは小さな草だった

大雲降大雨

『法華經』葉草喻品の大雲が大雨を降らせ

隨分各受榮

草木が分に從って成長繁榮するように

心想起異解

人間の心起も異なった見解をおこし

報応有殊形

その結果がちがった形として現象する

差別豈作意

差異あることをなぜ強いて意に介しよう

深淺固物情

深い浅いはそれぞれの物の性情によるのだ

詩のなかで「晩年」とはいつても、八十六歳まで生きた武帝の何歳の時の作かはわからないので、これを文字通りの晩年の思想と断定することはできませんが、すでに皇帝となった三十九歳以後のものであることはまちがいない、あるいは五十歳前後のものでもありませんか。

皇帝になるまえの蕭衍についてはこれまでにすこし触れました。四六四年、蘭陵の蕭順之の三男として秣陵県（今の南京市南郊）に生まれ、文武にすぐれ、齊の竟陵王の八友の一人として青年時代から有名であり、おそらく王の薫陶によって仏教徒となり、齊の武帝の死後、明帝と結んで地位を固め、明帝の死後、その後を継いだ東昏侯が悪政の結果として殺され、擁立された和帝の譲りをうけて、五〇二年、三十九歳で帝位につき、国号を梁と称し、天監と改元した、というのがその大体です。

かれの死は五四九年で、八十六歳。その後も、簡文帝、元帝、敬帝という三人の皇帝が立ちますがいずれも傀儡で、在位は二、三年、五五七年には滅亡します。武帝の四十八年が、梁という朝廷の実質だったわけです。